

オデュッセウスは生まれ故郷にたどり着くこととして放浪の旅を続ける。さまざまの危険に遭遇して自分の智力によって切り抜けてきた彼にとっては、もう神々は信頼できないものとなる。女神カリュプソの島にうちあげられ、彼女から愛人として迎えられる。しかし彼女の腕に抱かれながらも彼の求める心の平和を見いだすことができない。とめるのをふり切って再び船出し、故郷にたどりついたが既に彼は魂の故郷を失っており、ついに心の平安を得ることができなかつた。これは現在のオーストリーの作家チャールの劇「カリュプソ」の主題であり、神を失った現代人の姿が象徴化されている。

また、この放浪のエピソードに、オデュッセウスの家来たちは魔女キルケーによって豚に変えられ、彼自身も一年にわたって彼女の魔の魅力にとりつかれる話がある。フランスの作家オーディベールテイはこの神話から、燃えたぎる本能のままに次々と男性を魅惑し破滅させていく女性のタイプを、パリーの下宿屋のマダム、キルケーという状況におき変えて劇化している。

さて、これは文学史上の一例にすぎない。筆者の言いたいことは、人間世界に生ずるべきことの原型は既にギリシアにおいて

語りつくされているということである。トロイア落城の際の懐かな物語を素材としてギリシアの詩人エウリピデスは「トロイアの女たち」という劇で、ペロポネソス戦争におけるメロス島の大虐殺を非難した。この劇の筋をそのままとりいれてドイツの詩人ヴェルフェルは、無気味に迫り寄る第

私の研究
現代文学における
ギリシア神話
竹部琳昌

一次大戦の恐怖を警告した。サルトルも同名同筋の劇で植民地支配の非道性を指摘し更にヴェトナム反戦を鼓吹している。

かようにしてギリシア神話がそれぞれの時代の作家によって、新しい意図と解釈のもとにとりあげられているのである。同一の素材が各時代や各国の作家においてどん

な理念や手法のもとにとり扱われているか、この問題にとりくむことは文学史においてだけではなく、思想史的にも文化史的にも有意義なことと思う。西洋古典語文学を専攻し、いま現代語と古典語の両域の教育の任にある筆者にとって、研究の面においても教育と関連させるために可能な唯一のことは、古典古代の鏡に照らして現代文学を考察していくことであり、しかもこれはまた筆者としてはじめて可能なことと自負している次第である。ここ数年間、アンチゴネーの素材を通してソポクレス、ヘルダーリン、アヌイ、ブレヒト等の詩人を考察してきた。

ギリシア悲劇において最大のウェイトをもっているのはミケナイ王家の物語であり、今世紀になってもホフマンスタール、オニール、ジロドウ、ハウプトマン、T・S・エリオット、サルトル等によってとりあげられていく。これらの作品を古代の原型を軸として比較考察することによって、それぞれの作家や作品の特質を浮き彫りにしていく仕事に目下手をつけている。このような研究方法の集積によって世界文学史を書くこと、これはいつまでも充たされぬ夢かもしれない。

(大学工学部教授・独語・古典語)